

昭和二十七年九月十五日印刷  
昭和二十七年九月二十日發行  
（毎月二十日發行）

第 27 卷 第 9 号

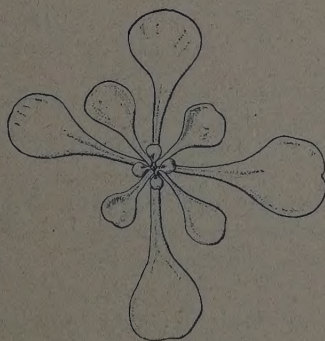
Vol. 27 No. 9

# 植物研究雜誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

昭和 27 年 9 月

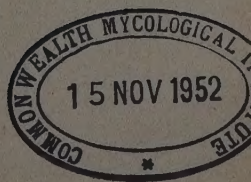
SEPTEMBER 1952



津村研究所

Tsumura Laboratory

TOKYO



# 目 次

下 村 孟: 局方粉末生薬の研究 (1) .....	(261)
佐 竹 義 輔: ホシクサ属雑記 (1) .....	(264)
西 田 誠: ハナヤスリ目の新分類 (羊歯植物の分類學的 位置及構成の研究—3) .....	(271)
櫻 井 久 一: 興味ある日本産蘚類報告 (3) .....	(279)
野 口 彰: 日本産蘚類の研究 (13) .....	(285)

## 雑 録

豊國秀夫・五十嵐恒夫: カオルツガザクラ (263) —— 奥山春季: 植物採  
集覺書追記 (其二) (268) —— 大井次三郎: ワスレナグサ本州に歸化す  
(270) —— 上野裕: 海拔200 mにしてダケカンパあらわる (284) —— 久内  
清孝: 乳汁をもつマメ科植物の例 (284) —— 藤田安二: 我國への稻の傳來  
方向 (290)

## Contents

Tsutomu SHIMOMURA: Microscopical anatomy of powdered vegetable drugs in the Japanese Pharmacopoeia (1) .....	(261)
Yoshiyuke SATAKE: Miscellany on <i>Eriocaulon</i> (1) .....	(264)
Makoto NISHIDA: A new system of Ophioglossales (Studies on the systematic position and constitution of Pteridophyta-3) .....	(271)
Kyuichi SAKURAI: Reports of some interesting mosses in Japan (3) .....	(279)
Akira NOGUCHI: Notes on Japanese Musci (13) .....	(285)

## Miscellaneous

Hideo TOYOKUNI & Tsuneo IGARASHI: *Phyllocladus tsugifolia* var. *oblongo-  
ovata* f. *viridiflora* Toyokuni (263) —— Shunki OKUYAMA: Some additions  
and corrections of names of plants used in my previous writings (2) (268)  
—— Jisaburo OHWI: *Myosotis scorpioides* naturalized to Honshu (270) ——  
Yutaka UENO: *Betula Ermani* var. *communis* appears at 200 m above  
the sea-level (284) —— Kiyotaka HISAUCHI: An instance of leguminous  
plants having milk sap (284) —— Yasuji FUJITA: From where *Oryza  
sativa* L. came to the Japanese Islands (290)

〔表紙のカットの説明〕説明は第 7 號表紙裏参照のこと

# 植 物 研 究 雜 誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第 27 卷 第 9 號 (通卷 第 296 號) 昭和 27 年 9 月發行

Vol. 27 No. 9 September 1952

## 下 村 孟\*: 局方粉末生薬の研究 (1)

Tsutomu SHIMOMURA\*: Microscopical anatomy of powdered vegetable drugs in the Japanese Pharmacopoeia (1)

市場の粉末生薬を鏡檢すると偽和品の多いのに驚く。日本薬局方では第六改正において、新たに個々の生薬の項に粉末生薬の規定が設けられたが、これを役立たせるためにはそれを構成する各要素の檢鏡圖があれば、非常に便利であると考えたので、諸外國の文献にないもの及び日本でも未だに研究の行われていないものについて、主として顯微鏡を用いて研究を實施した。

鏡檢すると粉末の各要素は單獨又は數個連繋し、多くはそれらの破片として現われ、又細胞内の含有物もしばしば遊離しているが、各論においてはその状態を一々特記しない。各論における構成要素の配列順序は、しばしば現われてその粉末の特徴となるものから始め、以下まれに現われる要素の順とする。

本研究に當つて御鞭撻を賜つた東大薬學科の朝比奈名譽教授、柴田教授、藤田助教授、當試験所の近藤所長、田中部長、山口部長に深謝する。又一部を厚生省科學研究補助金に仰いだことを感謝する。

### (1) キキョウ末 *Platycodon Pulverata*

祛痰薬として用いられ、特に家庭薬の風邪薬、咳止め等に多量使用されるキキョウ末には、皮付き末と皮去り末との 2 種がある。淡灰黄色～淡灰褐色を呈し虫害を受け易い。市場品を檢すると皮付き末と皮去り末との比は 3:1 で、その中には同色系統で且つ廉價の茯苓末で偽和したものが認められた。これらの市場品の溶血指數を測定\*すると、皮去り末で平均 892、皮付き末で平均 735、茯苓末混有の不良品では 454 を示した(昭. 24. 調べ)。

キキョウ末をグリセリン・水 (1:1) 又はグリセリン・アルコール (1:1) に浸して鏡檢すると [Fig.1],

\* 國立衛生試験所 National Hygienic Laboratory.

\* 草味・末永: 桔梗について. 軍醫雜誌 275: 504 を準用.

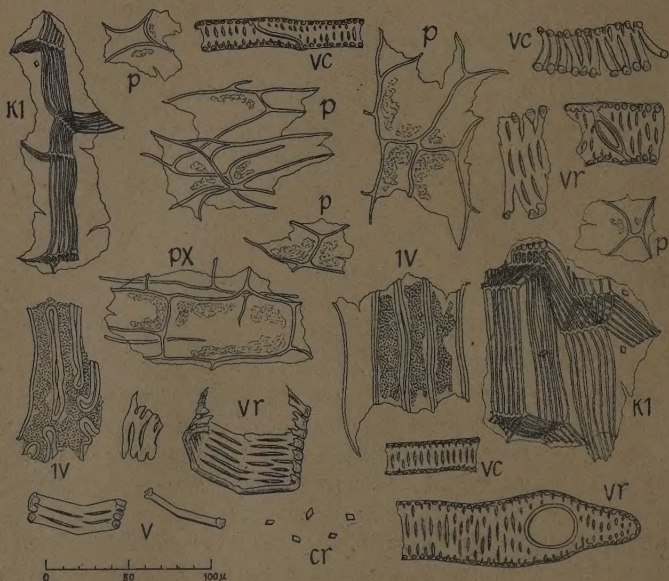


Fig. 1 キキヨウ末梢鏡圖×270(説明本文中)

**p** 柔細胞：形は不整，その膜は無色でうすく，絮状の内容物を含有しイヌリンの反應を呈する。

**v** 導管：主として階紋及び網紋導管の破片からなっている。

**vc** 階紋導管：徑  $20\sim30\mu$ ，まれに單セン孔を認める。

**vr** 網紋導管：徑  $35\sim60\mu$ ，しばしば單セン孔を認める。

**lv** 連合乳管：しばしば篩管部に接して存在し，やや厚膜の乳管の連接した形，又は乳管が數個連合した形で現われ，淡黄色の内容物を充滿している。この内容物はルテニウム赤，スダン III，ヘマトキシリンによつて赤色に染色し，ヨード・ヨードカリウム試液によつて黄褐色を呈する。

**px** 木部柔細胞：皮部の柔細胞に比し形がほぼ矩形を呈している。

皮付き末においては

**kl** コルク層：主としてほぼ表面視として現われ，6~8層の平たいコルク細胞からなる。コルク細胞は長徑約  $100\mu$  に達する多角形で，膜の厚さは  $1\sim2\mu$  で褐色を呈し，内部に少數の修酸カルシウムの板狀晶を含む。

**cr** 修酸カルシウムの結晶：コルク層中の結晶が遊離して現われ，長邊約  $5\mu$  短邊約  $3\mu$  の平行四邊形を呈する板狀晶である。

## Summary

**Powdered Platycodon** (Fig. 1). Pale dusky yellow to dusky brown powder, with or without fragments of cork layer.

**p**: colorless parenchyma, containing inulin. **v**: fragments of vessels. **vc**: scalariform vessel, 20–30 $\mu$  in diameter. **vr**: reticulate vessel, 35–60 $\mu$  in diameter, often with simple perforation. **lv**: lactiferous vessel, containing pale yellow latex. **px**: xylem parenchyma. **kl**: cork layer, 6–8 layers of cork cells, chiefly in surface view and containing single crystals. **cr**: single crystals of calcium oxalate, up to 5 $\mu$  in length and 3 $\mu$  in width.

**○カオルツガザクラ** (豊國秀夫・五十嵐恒夫) Hideo TOYOKUNI and Tsuneo IGARASHI : *Phyllodoce tsugifolia* var. *oblongo-ovata* form. *viridiflora* Toyokuni.

北海道石狩國タ張岳の頂上に達する少し手前に釣鐘岩と云う巨大な釣鐘の形をした岩があるが、その附近、矮小灌木類の多い地帯で花冠が帯緑白色を呈しているエゾナガバツガザクラを取つた。これは花冠の色の違いの外に、花梗が帯褐緑色で褐毛ある事、萼が緑色で、裂片は上部が縁に沿つて僅に帯紅褐色をなす點で基準變種と異り、丁度、アオジクツガザクラ、セイカコツガザクラ等に對應する型であると思われる。未だ命名がないと思うので一新品種とし、和名は長くなるのをさける爲、カオルツガザクラとしたいと思う。又、同じく石狩國大雪山國立公園、ニセイコウシユベ山の頂上を間近に見る岩上で、エゾナガバツガザクラを取つた。北限と思われる故附記して置く。

*Phyllodoce tsugifolia* Nakai var. *oblongo-ovata* Tatewaki in Journ. Sapporo Soc. Agr. & For. 28-131: 22 (1936).

Hab. ad saxum prope apicem montis Niseikaushupe, prov. Ishikari (8 Aug. 1951, H. Toyokuni et T. Igarashi, nos. 3429 et 3430). Mons Niseikaushupe limes septentrionalis huius plantae est.

forma **viridiflora** Toyokuni, form. nov.—A typo pedunculis fuscescenti-viridibus fusco-pubescentibus, calycibus viridibus, sepalis in parte superiore secus marginem minute fusco-rubrescentibus, corollis tote viridescenti-albis distinguenda.

Hab. prope Tsuriganeiwa montis Yûpâri, prov. Ishikari (27 Jul. 1951, H. Toyokuni, no. 2597—typus in herb. Univ. Hokkaidô).

## 佐竹義輔\*: ホシクサ屬雜記(1)

Yoshisuke SATAKE\*: Miscellany on *Eriocaulon* (1)

1940年、日本産ホシクサ屬をまとめて(大日本植物誌 第6號及び東京科學博物館研究報告第4號)から今日迄に氣づいたこと或は訂正することを順序なく述べて見たい。

どの植物についても同様であるが、ホシクサ屬についてもある種は比較的安定して他種と連続しないが、ある種は近似の種と中間型を通じて連繫する。これらの中間型をどう見るかによつて見解の相違が起るわけである。

ホシクサ屬は、分類の特徴が全く頭花におかれ、しかも花を構成する苞、萼、花瓣、雄蕊、雌蕊、更に種子に至るまで極めて小さく低倍率の顯微鏡を用いなければならないので、顯微鏡的形質を過大視する傾向があつた(尤も、本質的には、肉眼によるうがルーペによるうが、顯微鏡によるうが、觀察が適正でなければ同様である)。この點を考え直し、他に氣づいたことを合せて、次のような知見になつたわけである。

1. シロイヌノヒゲ *E. sikokianum* とその變型。シロイヌノヒゲは本州中部から四國、九州、朝鮮に分布するが、花苞の上部や萼の上縁に白い單細胞の毛の多いのが普通である。最近下野産、筑前産のもので全く無毛の標本を實見したのでしらべて見ると、花托に毛のない點なども全く琉球産のオキナワホシクサ *E. lutchuense* に一致することがわかつた。オキナワホシクサがシロイヌノヒゲに近縁のものであることは既に大日本植物誌でもふれておいたが、今度、九州から本州にも産することがわかり、その相違は別種とするに足りないと考えるので、變種として扱いたい。

マツムライヌノヒゲ *E. Matsumurae* はシロイヌノヒゲに似て子房が2室、柱頭が2のものが混在し、花托が無毛なものであるが、子房や柱頭が3數性から2數性に減ずることは他の種類でも時々起ることで、これだけで種の特徴とはなり得ない。ナガトホシクサもマツムライヌノヒゲとの相違は花托が有毛な點だけである。それで以上の種は右表のような關係に於て見るとき變種と認めた方が適當であると思う。

2. ニツボンイヌノヒゲ *E. hondoense* とその

花 托 子 房	無 毛	有 毛
	3 室	2—3 室
	オキナワホシクサ	シロイヌノヒゲ
	マツムライヌノヒゲ	ナガトホシクサ

變型。ニツボンイヌノヒゲは、花部にも花托にも毛のないのがタイプである。花托に毛のあるものを以前にケイヌノヒゲとし變種に扱つたが、これは品種に過ぎない。

花托に毛あり、全草貧弱で、花莖が10 cm、頭花は少數花で、雌花の萼が灰色で上縁が不規則に3裂し微小鋸齒を有するものが八幡平や盛岡市の近所に産するので、これにヒメイヌノヒゲの新名を與え、ニツボンイヌノヒゲの變種と考定することにした。また、

\* 國立科學博物館 National Science Museum, Tokyo.

タイプによく似て、總苞片が花部から著しく超出するものをホンザキヌノヒゲとしたことがあつたが、これは單なる個體變化としか考えられぬのでタイプに包含する。

3. **イヌノヒゲ** *E. Miquelianum* とその變型。イヌノヒゲは花部に毛のあることはシロイヌノヒゲに似ているが、頭花は小さく、少數花から成り、總苞片が細長く花部より著しく長くなり、花托が無毛なので區別される。總苞片が極めて長くなるものをムツイヌノヒゲと考えられてきたが、ホンザキイヌノヒゲをニツボンイヌノヒゲから區別する理由がないと同様に、その必要が認められない。

朝鮮産のホソホシクサは、花が少數で、雌花の萼の背部にも毛があり、花瓣がやや廣いので別種とされていたがこれも種を區別する決定的の性質ではないと思われるので變種に下げることにしたい。基本種に似て花托が有毛、萼がやや黒味を帯びるものがタカユイヌノヒゲである。

4. **ヒロハノイヌノヒゲ** *E. robustius* とその變型。ヒロハノイヌノヒゲは、總苞片が圓頭で花部と同長又はより短かく、花部も花托も無毛の點でかなりはつきりした種である。花部は普通緑白色であるが、時には花の上部が黒ずむこともある。最近、磐城地方の標本で、頭花が最外部の總苞片と花瓣を除いて殆んど眞黒になるものがあるのを見た。1 變種と考えクロヒロハノイヌノヒゲと呼びたい。

このクロヒロハノイヌノヒゲは、頭花が少數になり、全草貧弱になると、クロイヌノヒゲに似てくる。一方、クロイヌノヒゲには、花数が多く花部がそれ程黒くならないサイヨククロイヌノヒゲという變種があるので、これらの関係が中々面倒である。以前、筆者はクロイヌノヒゲを含む一群に、花部が黒いために1節を設けたことがあつたが、誤りであると今は考えている。この事については次の機會に述べてみたい。

1). *Eriocaulon sikokianum* Maximowicz, Diagn. Pl. Nov. As. 8:16 (1892).

A. Ovary and stigma trimerous.

B. Receptacle pilose; floral bracts and calyces much ciliated at the apex ..... var. *sikokianum*

BB. Receptacle glabrous; floral bracts and calyces nearly glabrous ..... var. *hutchuense*

AA. Ovary and stigma dimerous mixed with trimerous.

B. Receptacle glabrous ..... var. *Matsumurae*

BB. Receptacle pilose ..... var. *piliphorum*

*Eriocaulon sikokianum* Maxim. var. *sikokianum*

*E. sikokianum* Maxim. l. c. (1892) — Ruhland, *Eriocaul.* 12 (1903) — Satake, *Eriocaul.* in Nakai & Honda, *Nov. Fl. Jap.* 6: 56, f. 26 (1940); Revision of *Jap. Eriocaulon* in Bull. Tokyo Sci. Mus. 4: 44 (1940).

Nom. Jap. Siro-inunohige. Distr. Honsyu, Sikoku, Kyusyu and Korea.

var. **lutchuense** (Koidz.) Satake, stat. nov.

*E. lutchuense* Koidzumi in Bot. Mag. Tokyo, 28: 171 (1914)—Satake, Erioc. 48, f. 21 (1940); Revis. 35, pl. 6, f. 12 (1940).

Nom. Jap. Okinawa-hosikusa (Koidz. 1914). Distr. Honsyu (Prov. Simotuke, n. 90078), Kyusyu (prov. Tikuzen, 68180) and Ryukyu. New to Honsyu and Kyusyu.

var. **Matsumurae** (Nakai) Satake, stat. nov.

*E. Matsumurae* Nakai in Bot. Mag. Tokyo, 24: 5 (1910)—Satake, Erioc. 41 (1940); Revis. 29, pl. 5, f. 9 (1940).

Nom. Jap. Matumura-inunohige (Makino et Nemoto 1925), Kibi-ōinunohige (Nemoto 1936). Distr. Honsyu (prov. Bittyu).

var. **piliphorum** (Satake) Satake, stat. nov.

*E. piliphorum* Satake in Bot. Mag. Tokyo, 51: 286, f. 1 (1937); Erioc. 42, f. 18 (1940); Revis. 30, pl. 5, 10 (1940).

Nom. Jap. Nagato-hosikusa (Satake 1937). Distr. Honsyu (prov. Nagato).

2) **Eriocaulon hondoense** Satake in Bot. Mag. Tokyo, 51: 288, f. 3 (1937).

A. Plant rigid; head multiflorous, receptacle glabrous or pilose,

sepal ♀ albescent trilobulate at the apex ..... var. *hondoense*

AA. Plant dwarf; head pauciflorous, receptacle pilose, sepal ♀ glaucous

irregularly trilobulate and minutely serrulate at the apex.... var. *gracile*

*Eriocaulon hondoense* Satake var. **hondoense**.

*E. hondoense* Satake, l. c. (1937); Erioc. 49, f. 22 (1940); Revis. 37, pl. 7, f. 13 (1940). *E. hondoense* var. *stellatum* Satake, l. c. 290 (1937); l. c. 51 (1940); l. c. 40 (1940).

Nom. Jap. Nippon-inunohige (Satake 1937), Hosizaki-inunohige (Satake 1937). Distr. Hokkaido, Honsyu, Sikoku, Kyusyu and Korea.

f. **pilosum** (Satake) Satake, stat. nov.

*E. hondoense* var. *pilosum* Satake, l. c. (1937); l. c. 51 (1940); l. c. 40 (1940).

Nom. Jap. Ke-inunohige (Satake 1937). Distr. Honsyu and Kyusyu.

var. **gracile** Satake, var. nov.

Planta humilis, foliis fere 8 cm longis 3 mm latis, pedunculis 5-10 cm altis haud tortis, vaginis laxis, capitulis obconicis, paucifloribus (fere 3-8), receptaculis pilosis. Sepala fl. ♀ dilute glauca, apice irregulariter trilobata lobulis minutissime serrulatis. Cetera ut in typo.

Nom. Jap. Hime-inunohige (nov.). Hab. Honsyu: prov. Ugo, Hatimantai

(n. 90079-type in Herb. Nat. Sci. Mus.) and prov. Rikutyu.

3) **Eriocaulon Miquelianum** Koernicke in Miquel, Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 3: 162 (1867).

A. Head multi- or pauciflorous; receptacle glabrous, sepal albescent.

B. Head multiflorous; sepal ♀ ciliolate at upper margin, petal ♀ narrower ..... var. *Miquelianum*

BB. Head pauciflorous; sepal ♀ ciliolate at upper margin and dorsal side, petal ♀ broader ..... var. *tenuissimum*

AA. Head pauciflorous; receptacle pilose, sepal atrate ..... var. *atrosepalum*  
*Eriocaulon Miquelianum* Koernicke var. **Miquelianum**.

*E. Miquelianum* Koernicke, l. c. (1867) — Franchet & Savatier, Enum. Pl. Jap. 2: 99 (1879) — Maximowicz, Diagn. Pl. Nov. As. 8:17 (1892) — Ruhland, Eriocaul. 92, f. 10 (1903) pro parte—Satake, Erioc. 57 (1940); Revis. 46 (1940).

*E. Miquelianum* var. *involutratum* Nakai in Bot. Mag. Tokyo, 24: 6 (1910)—Satake, Erioc. 58 (1940) et Revis. 48 (1940).

Nom. Jap. Inunohige, Mutsu-inunohige (Nemoto 1936). Distr. Honsyu, Sikoku and Kyusyu.

var. **tenuissimum** (Nakai) Satake, stat. nov.

*E. tenuissimum* Nakai in Bot. Mag. Tokyo, 31: 97 (1917) — Satake, Erioc. 59, f. 27 (1940); Revis. 49, pl. 7, f. 14 (1940) — Nakai in Bull. Nat. Sci. Mus. 31: 128 (1952). *E. Miquelianum* sensu Mori, Enum. Pl. Corea, 80 (1922).

Nom. Jap. Hoso-hosikusa (Nakai 1917). Distr. Korea.

var. **atrosepalum** Satake in Journ. Jap. Bot. 15: 629 (1939); Erioc. 58 (1940); Revis. 48 (1940).

Nom. Jap. Takayu-inunohige (Satake 1939). Distr. Honsyu (prov. Uzen).

4) **Eriocaulon robustius** (Maxim.) Makino in Journ. Jap. Bot. 3: 26 (1926).

A. Head albescent, occasionally atrate at upper part ..... var. *robustius*

AA. Head quite black, except petals and outermost involucre bracts  
..... var. *nigrum*

*Eriocaulon robustius* (Maxim.) Makino var. **robustius**.

*E. robustius* Makino, l. c. (1926) — Steinberg in Fl. U. R. S. S. 3: 497, tab. 27, f. 4 (1935) — Hara in Bot. Mag. Tokyo, 52: 401 (1938) — Satake, Erioc. 46, f. 20 (1940); Revis. 33 (1940). *E. alpestre* β. *robustius* Maxim. Diagn. Pl. Nov. As. 8: 25 (1892). *E. alpestre* sensu Ruhland, Eriocaul. 95 (1903) p. p. *E. Buergerianum* sensu Miyabe & Kudo, Fl. Hokkaido and Saghal. 3: 287 (1932).

Nom. Jap. Hirohano-inunohige. Distr. Hokkaido, Honsyu, Sikoku, Kyusyu,

Korea, Manchuria and Siberia.

f. **perpusillum** (Nakai) Satake, stat. nov.

*E. alpestre* var. *perpusillum* Nakai in Bot. Mag. Tokyo, 24: 6 (1910). *E. robustius* var. *perpusillum* Satake in Journ. Jap. Bot. 15: 629 (1939); Erioc. 48 (1940); Revis. 36 (1940).

Nom. Jap. Tyabo-inunohige (Nemoto 1936). Distr. Honsyu (prov. Mutu).  
var. **nigrum** Satake, var. nov.

Bracteae et sepala omnino nigra. Nom. Jap. Kuro-hiroha-inunohige (nov.).  
Hab. Honsyu: prov. Simotuke (n. 90076-type in Herb. Nat. Sci. Mus. Tokyo) and Iwaki.

○植物採集覺書追記 (其二) (奥山春季) Shunki OKUYAMA: Some additions and corrections of names of plants used in my previous writings (Tentative list of plants for collectors 1-12) (2).

前回に續き關東地方の部の増補と訂正の分に就て現在手元にある資料をまとめて報告しておきたい。

石神井 (三寶寺池) ——原產地植物 *Utricularia siakuiensis* S. Nakajima シヤクヂキタヌキモ東京都緑地計畫調査彙報 9: 90, pl. 2 (1937), 原: 種子植物集覽 1: 293 (1949)

御岳山——原產地植物 ミドリケタテツボスミレ 植研 26: 157 (1951)

日原——訂正 イハゼキシヤウをチャボゼキシヤウ (一型) とする。イハゼキシヤウ *Tofieldia nuda* Maxim. は三河, 伊勢, 越前, 丹波, 丹後, 但馬, 近江, 山城, 周防, 肥前等から知られて居るが關東地域及び四國からはまだ採集されて居ない様である。

有間谷一棒ノ嶺——シライトサウを新變種アツマシライトサウ (新稱) として記載する。

*Chionographis japonica* Maxim. var. **Hisauchiana** Okuyama, var. nov. Tepala superiora lineari-spathulata, 2-3.5mm longa, inferiora 2-2.5mm longa. Stigmata 0.3-0.5mm longa. Hab. Honshu: Prov. Musashi, Kasumimura (T. Satow, Jun. 3, 1951—typus in Herb. Nat. Sci. Mus. Tokyo; Mai. 14, 1950), Naguri (S. Okuyama, Apr. 21, 1940).

久内清孝氏の指導の下に博物館の採集會一行が埼玉縣の名栗から棒ノ嶺を越へた事がある。この日は雨が降つて居たが麓の名栗村に於てシライトサウを発見し、關東地方に於ける初発見として喜んだ。昭和15年4月21日の事である。ところが昭和25年の5月佐藤達夫氏 (法制意見長官) が東京都下霞村にて關東第2の産地を見出し我々を驚かした。シライトサウは裏日本では北は越後に及んで居るが、太平洋側は静岡縣 (富士山麓の記録があり博物館には遠江油山の標本がある) までは知られて居なかつたもの

である。然し關東の前記 2 産地のものを見ると花蓋片は非常に短く上部の 4 長片が長さ 2-3.5 mm (シライトサウでは 6-15 mm) あり、柱頭は短く長さ 0.3-0.5 mm (シライトサウでは 1 mm 許) で、西日本の美麗な花惠を知つて居る者には如何にも弱々しく感ずる。私は關東のものを地域的な一型と見て上記の如く區別した。

武甲山——原産地植物 *Buddleja Shimidzuana* Nakai チチブフヂウツギ科博研報 29: 75 (1950), *Euonymus melananthus* var. *dependens* Nakai, l. c. 80 (1950), *Primula rhodotricha* Nakai et F. Maekawa チチブイハザクラ l. c. 85 (1950)

犬吠崎——原産地植物 *Carex pineticola* Ohwi マツカゼスゲ科博研報 26: 5 (1949)

清澄山——訂正ヨグソミネバリ・タラエフ・ネコノチチの 3 種を収録したが、「千葉縣の植物」より) 東大演習林地域の栽植品ならんと東大農學部倉田悟氏の談により削除。コバノミツバツツジも同じく削除する。



アヅマシライトサウ

横濱——原産地植物 *Rubus coptophyllus* A. Gray [モミヂイチゴ] Perry, Jap. Exped. 2: 311 (1853), *Carex transversa* Boott [ヤハラスゲ] l. c. 324, *Salix viridula* Anders. in A. Gray, Bot. Jap. 451, *Salix vulpina* Anders. [キツネヤナギ] l. c. 452, *Isoetes japonica* Al. Br. [ミヅノラ] Verh. Bot. Ver. Brandenb. 4: 329 (1862), タイリントニギキヤウ植研 21: 20 (1947)

丹澤山塊——ウメウツギ *Deutzia uniflora* Shirai を追加する。本州の分布は關東の一部秩父から武蔵刈寄山までと富士山の西側天子ヶ岳に知られて居たものであるが、昭和 26 年 8 月

地元の相模生物同好會採集會のお伴をして丹澤山にも産する事を明らかにした。其他フジチドリ (樹幹上)・ミヤマフタバラン *Listera nipponica* Makino・ヒメテンマ・ミヤマヤブニンジン・キバナウツギ *Weigela Maximowiczii* Rehd. 等を採集した。

尙覺書には「神奈川縣植物目録」よりアハモリシヨウマ・エゾノウハミツザクラ・コバノミツバツツジを収録したが削除すべきものと考へる。アハモリシヨウマは恐らくフ

ジアカシヨウマ或はヤマブキシヨウマの矮小型を、又エゾノウハミヅザクラはミヤマイヌザクラ(シウリザクラ)の誤記かと考える(ミヤマイヌザクラの産する事は久内清孝氏の報告がある—植研 5: 35)。原産地植物 *Astilbe simplicifolia* Makino ヒトツバシヨウマ植維 7: 103 (1893) (原文の産地は Japan となつて居るが丹澤山産のものを紋章學の沼田頼輔氏が牧野博士に提供されたものの由久内清孝氏より御示教をうけた)を追加。

江ノ島——原産地植物 *Euonymus japonicus* var. *radicifer* Nakai ツルオホバマサキ植維 41: 509 (1927)

箱根——原産地植物 *Viturnum dilatatum* var. *microphyllum* Nakai ハコネガマズミ植維 41: 510 (1927). 削除 ホテイラン (cf. 自然科學と博物館 16-5, 6: 14-15). 訂正 ハウチハテンナンシヤウの産地を梶子とする。

日光地方——原産地植物 *Hosta venusta* F. Maekawa フトメギバウシ 植研 11: 245 (1935). 訂正 千手のシロウマワウギをカラフトモメンヅル *Astragalus Schelichowii* Turcz. (fide J. Ohwi). とする。

伊豆大島——原産地植物 *Rubus palmatus* forma *ribisifolia* Matsumura 植維 16: 1 (1902) = *R. ohsimensis* Koidz. マルバノモミヂイチゴ Consp. Ros. Jap. 129 (1911), *Hydrangea involucrata* var. *multiplex* Nakai ヤウラクタマアデサキ 植研 25: 130 (1950), *Acer mono* var. *eupictum* forma *heterophyllum* Nakai ナナバケイタヤ l. c. 133 (1950).

櫛形山——訂正 カメバサウはカメバヒキオコシの誤記。

〇ワスレナグサ本州に歸化す (大井次三郎) Jisaburo OHW1: *Myosotis scorpioides* naturalized to Honshu.

Forget-me-not の英名のある *Myosotis scorpioides* Linn. (*M. palustris* Hill) が十數年前から信州の松本郊外に歸化して居るのを、松本博物館下川頼人氏から標品を頂いたので報告する。郊外の湿地田溝等に生じ、次第に殖へて行きつゝあり、土地の人は開花期には美しいので採つて花瓶等に挿して觀賞すると云ふ。牧野植物圖鑑 576 圖に圖があるが左側の萼の圖は開出毛があつて、その上に5深裂する様であるが、實際には萼は1/3 位まで5淺裂し、萼の外側には壓短毛が疎生するだけである。タビラコモドキも之れに良く似て居るが莖葉の毛も全く壓毛であり、花は少し小さく、萼は5中裂する。尙ワスレナグサの標本が北海道根室附近でも採集されて居るが、これも或は歸化品であるのかも知れない。植物總覽には北海道に自生する様に書してあるが、日本には分布の上から恐らく自生品は存在しないと考へられる。

## Makoto NISHIDA\*: A new system of Ophioglossales

(Studies on the systematic position and constitution of Pteridophyta—3)\*\*

西 田 誠\*: ハナヤスリ目の 新分類 (羊歯植物の

分類的位置及構成の研究—3)

## 1. Introduction

Recently the writer published a paper on the dichotomous character of vascular system in the stalk of Ophioglossaceae, and suggested that this character could be used in classifying this group as it is considerably characteristic according to each genus or subgenus in this family (Nishida, 1952). The writer will approve of adopting a feature of the vascular bundle as a mark of classification in the ferns, though it is refused by American pteridologists (ex. Copeland, 1947), for features of vegetative organs show sometimes more radical marks of phylogeny than those of reproductive. Beyond his former attempt of classifying genera and subgenera in Ophioglossaceae, a single family, the writer is constructing a new system including all the members of the order Ophioglossales, though it may differ considerably from what is used widely.

## 2. Discussion

According to Clausen (1938) *Botrychium* is divided into three subgenera, *Sceptridium*, *Eubotrychium* and *Osmundopteris*, of which the first one is classified as the most primitive, because of its very wide and general distribution, relatively large and much divided leaves, the type of development of its sporophyte possessing a suspensor, and its primary root developing down through the prothallium. Moreover, he considered that its tendency towards the smaller leads to *Eubotrychium*, while that becoming larger to *Osmundopteris*.

However, from the viewpoint of the present writer (1952), established upon the vascular anatomy, *Eubotrychium* must be the most primitive group, succeeded by *Sceptridium* and *Osmundopteris* as becoming larger.

There is hardly any reasons of classifying *Sceptridium* as the most primitive of three. *Osmundopteris* has been found neither in Australian region nor in

\* Biological Institute, College of Arts and Sciences, Chiba University, Chiba and Botanical Institute, Faculty of Science, University of Tokyo, Japan.

千葉大学文理学部生物學教室及東京大学理學部植物學教室

\*\* No. 1: Journ. of College of Arts and Sci., Chiba Univ., 1: 32 (1952).

No. 2: Journ. Jap. Bot., 27: 165 (1952).

southern parts of South America, being limited to northern districts rather than tropical regions. This may indicate that this group is not so old like other two. If we compare *Sceptridium* which is distributed very widely over the world, of course in far southern region too, (therefore seems to be the most primitive) with *Eubotrychium* of which two species are still distributed in southern parts of South America and in Australia, though much more limited in distribution than the former, it could not be determined exactly whether the former is more primitive than the latter or not, only on the basis of their geographical distributions.

As for embryological grounds, only those who were dazzled by Bower's "primitive spindle" (1909, 1923, 1935) agree it that the presence of a suspensor appeared at the first cleavage means a primitive type of development in the ferns. Bower's hypothesis must have resulted from direct comparison of this order with *Eusporangiatae* and *Leptosporangiatae*, for he seems to have believed that both of these groups of the ferns should be placed phylogenetically on the same line, regarded *Eusporangiatae*, in which archaic marks like those found in fossil *Ur-pteridophyta* are conserved to a certain extent, to be more primitive than *Leptosporangiatae*. As for phylogenetic relation of *Eusporangiatae* and *Leptosporangiatae*, the writer thinks that they should not be placed on the one same line, but they should be phyletic and have to be placed on different parallel lines, though both being considerably near with each other. Here the writer maintains that the presence of suspensor should be considered once more, upon another phylogenetic point of view, for the presence or absence of a suspensor does not always mean that the type of development, in ferns at least, is primitive or not.

As for further detail of this phylogenetic view, the writer has no space to interpret now, and he will do it in future. Also to the form of gametophyte the same consideration as above could be applied.

Those who maintain that the cylindrical gametophyte like that found in *Sceptridium* is more primitive than somewhat flattened one of *Eubotrychium* are following Bower's way, for they always do this by comparing it directly with wormlike gametophyte of *Eusporangiatae* and flat one of *Leptosporangiatae*, looking upon these two as lying on the same phylogenetical line. Moreover, there may be no ground to regard what has "relatively large and much divided leaves" to be more primitive. Thus Clausen's arrangement of subgenera of *Botrychium* will fail to have any sense.

On the contrary, according to the established theory that the dichotomy is an archaic feature of branching in Cormophyta, Eubotrychium, in which typical dichotomy of the vascular system occurs, must be more primitive than Sceptridium with somewhat sympodialized type.

Nobody will deny that Osmundopteris is the most latest derivative among three subgenera, and it resembles to *Helminthostachys* closely in the following points:

- 1) Behaviour of the vascular system: III occurs through the "Extramarginal method".
- 2) Secondary tissue: in Osmundopteris definite cambium zone is frequently seen while in *Helminthostachys* the secondary tissue is very rudimentary.
- 3) Sheathed base of the stalk of Osmundopteris is open to one side, and is somewhat like and seems to be homologous to the stipular appendage at the basal part of the stalk of *Helminthostachys*.

Although the difference of vascular anatomy between Osmundopteris and Sceptridium seems to be intermediated by *Bot. multifidum*, in which the "Extra-marginal" methods occur at III (Chrysler 1945), yet the writer may draw a distinct line between them, for, in the former, another division of vascular bundles precede III, namely Extramarginal method, while it does not occur in the latter.

Clausen (1938) divided *Ophioglossum* into four subgenera, Rhizoglossum, Euophioglossum, Ophioderma and Cheiroglossa. However, upon the standpoint of vascular anatomy as above, and from the reasons as below, these four may be regarded as independent from each other.

Euophioglossum has still III, while in either Ophioderma or Cheiroglossa, no dichotomy is seen, and now Cheiroglossa is distinct from Ophioderma for it has several fertile segments. Moreover, the present writer agrees with Copeiland (1947) in treating Rhizoglossum as an independent genus, for it has no common stalk.

Following Clausen's consideration these subgenera are arranged in the order successively of Cheiroglossa, Ophioderma, Euophioglossum and Rhizoglossum. Of course the latter ones seem to be farther derived. The writer, however, likes to reverse this order except Rhizoglossum, and to place Euophioglossum at first as the most primitive, because of its feature of the vascular system as explained above. As for Rhizoglossum, the writer will avoid to determine its systematic position because he has had no opportunity of seeing specimens of it or

any literatures enough to consider its systematic position until now, though some researchers pointed out that its morphological characters were simple and somewhat resembled to that of *Euophioglossum* (Clausen 1938, Bower 1924).

### 3. Conclusion

The phylogenetic relation between *Ophioglossum* and *Botrychium* has been taken to be difficult, for the former seems to be more primitive as regards the gametophyte but, on the other hand, relatively advanced with sporophyte which has anastomozation in its vascular system.

A direct comparison of both will make no sense. Whether the vascular system, namely nerves in the lamina, is constructed by anastomozing or by bifurcating, will be a demarcation in phylogeny, even though other points are so much alike.

The writer dealt with Ophioglossales and divided them into two suborders (Ophioglossineae and Botrychiineae), according to whether their nerves exhibit anastomozing or bifurcating. The former includes only one family, Ophioglossaceae, and the latter two, Botrychiaceae and Helminthostachiaceae. The last two have been classified as a family by some vegetative characters (cf. Ching 1940).

### Order Ophioglossales

#### Suborder I Ophioglossineae

Venation reticulate, sterile blades simple, sometimes bifurcate towards the apex or palmately lobed, more or less fleshy; fertile segment is a compact stalked spike, with a row of large immersed sporangia on each side.

Dichotomies of the vascular system in the common stalk obscure or non. Gametophyte branched, cylindrical, usually slender and linear, oblong or even stellate. No suspensor in development of embryo. Only one family, Ophioglossaceae.

#### Fam. Ophioglossaceae

Gen. 1 *Ophioglossum* L., Sp. Pl., 2: 1062 (1753); Genera: 503 (1745).

Sterile blades always entire, fertile segment arising medianly from or below the base of the sterile blade; dichotomies of the vascular system in the stalk vestigial.

Type: *Ophioglossum vulgatum* L., Sp. Pl., 2: 1062 (1753).

Gen. 2 *Ophioderma* Endlicher, Genera Pl.: 66 (1836).

Sterile blades much elongate, sometimes bifurcate towards the apex, rarely lacking; one fertile segment (rarely paired) born medianly somewhat above

the base on the face of the sterile blade. Dichotomous character of the vascular system in the stalk obscure and not visible.

Type: *Ophioderma pendula* Presl, Suppl. Tent. Pterid.: 56 (1845).

(*Ophioglossum pendulum* L., Sp. Pl. 2: 1063 (1753)).

Gen. 3 *Cheiroglossa* Presl, Suppl. Tent. Pterid.: 56 (1845).

Sterile blades palmately lobed or divided, usually with plural fertile spikes. Vascular supplies of fertile spikes alternate with that of sterile blades in adaxial half of bundles. Dichotomous character of vascular system in the stalk so obscure and not visible.

Type; *Cheiroglossa palmata* Presl, Suppl. Tent. Pterid.: 57 (1845).

(*Ophioglossum palmatum* L., Sp. Pl. 2: 1063 (1753)).

Gen. 4 *Rhizoglossum* Presl, Suppl. Tent. Pterid.: 48 (1845).

Completely dimorphous fronds fasciculate, no common stalk, fleshy, venation unknown, stipe with single bundle. Dichotomous character of vascular system none. Only one species.

Type; *Rhizoglossum Bergianum* Presl, Suppl. Tent. Pterid.: 48 (1845).

(*Ophioglossum Bergianum* Schlechtendal, Adumbratio Fil.: 25 (1825)).

Suborber II Botrychiineae

Venation dichotomous, free, sterile blades usually pinnately or palmately once or several times pinnate, rarely simple; fertile segment branching, sporangia clustered or crowded, not immersed. Dichotomies of the vascular system in the stalk obvious. Gametophyte small and cylindrical, often somewhat flattened or lobed. Sometimes embryo has suspensor.

Fam. I Botrychiaceae

Rhizome upright; sterile blades pinnately or palmately divided; fertile segments samely branching; sporangia clustered, opening with a transverse slit. Gametophyte short, cylindrical or somewhat flattened. Sometimes (only in *Sceptridium*) embryo has suspensor.

Gen. 1 *Botrychium* Swartz in Schrader's Journ. 2: 110 (1801).

Small plants, sterile blades pinnatifid or pinnate, glabrous and fleshy. Dichotomies of vascular system in the stalk complete and visible. Gametophyte small and somewhat flattened. No suspensor; root developing above and to the side of the prothallium in development of embryo.

Type; *Botrychium lunaria* (L) Swartz in Schrader's Journ. 2: 110, (1801).

(*Osmunda lunaria* L., Sp. Pl., 2: 1064 (1753)).

Gen. 2 *Sceptridium* Lyon in Bot. Gaz., 40: 457 (1905).

Moderate size. Both fertile and sterile segments divide from under part of the stalk, sterile blades ternately decompose; buds glabrous; vascular supply of fertile segment divided by marginal or rarely by extra-marginal method which is not preceded by any division. Gametophyte flattened dorsiventrally; embryo with suspensor and the primary root growing through the prothallium.

Type; *Sceptridium obliquum* (Muhl) Lyon in Bot. Gaz. **40**: 453 (1905).

(*Botrychium obliquum* Muhl. in Willd. Sp. Pl. **5**: 63 (1810)—*Bot. dissectum* Sprengel var. *obliquum* (Muhl) Clute in Clausen's Mem. Torrey Bot. Club. **19**: 82 (1938)).

Gen. 3. *Osmundopteris* (Milde) Small, Ferns of the Southeastern States: 377 (1938).

*Osmundopteris* Milde, as a section in *Botrychium*, in Fil. Europae. : 209 (1867).

*Osmundopteris* (Milde) Clausen, as a subgenus in *Botrychium*, in Mem.

Torrey Bot. Club, **19**: 93 (1938).

Plants still larger, sterile blade sessile decompose, deltoid and much divided, herbaceous with rather thin texture; buds hairy, often partially exposed as basal sheath breaks with longitudinal cracks. Vascular supply of fertile segment divided by extra-marginal method which is always preceded another division. Gametophyte short and cylindrical, no suspensor in the embryo, the primary root developing either from the side or from the upper surface.

Type; *Osmundopteris virginiana* (L.) Small, l. c.

(*Botrychium virginianum* Swartz, in Shrad. Journ. für die Bot. **2**: 111 (1800)).

The other species in this genus, as follows:

***Osmundopteris lanuginosa*** (Hook. et Grev.) Nishida, comb. nov.

(*Botrychium lanuginosum* Wall. in Hook. et Grev. Icones Fil. **1**: 74 (1827)).

***Osmundopteris cicutarica*** (Swartz) Nishida, comb. nov.

(*Bot. cicutaricum* Swartz, in Synopsis Filicum : 171 (1806)).

***Osmundopteris stricta*** (Underwood) Nishida, comb. nov.

(*Botrychium strictum* Underwood, in Bull. Torrey Bot. Club, **30**: 52 (1903)).

***Osmundopteris chamaeconia*** (Bitt. & Hieron.) Nishida, comb. nov.

(*Bot. chamaeconium* Bitter & Hieronymus in Engler & Prantl, Die Nat. Pflanzenfam., **1** (4 Abt.): 471 (1900)).

Fam. 2 Helminthostachyaceae

Rhizome creeping, Sterile blades palmately compound, sessile, fertile segment spike-like, with the numerous sporangia born in glomerules on the

very short (0.5mm) lateral branches; sporangia crowded, each opening by a longitudinal slit. Stalk with stipular appendage at basal part.

Gametophyte cylindrical, erect, stout and lobed below; embryo with suspensor. Only one genus.

Gen. *Helminthostachys* Kaulfuss in Flora : 103 (1822).

Type: *Helminthostachys zeylanica* (L) Hooker, Genera Filicum : 47 (1842).

#### Aknowlegement

The writer's thanks are due to Dr. Fumio Maekawa for his valuable suggestions and criticism given during the course of this work.

Gratefulness is also due to Dr. Hiroshi Hara for his kindness of giving permission to use his literatures.

#### Summary

1) Order Ophioglossales is classified into two suborders, Ophioglossineae and Botrychiineae, by the character of the vascular system.

2) Ophioglossineae includes one family, Ophioglossaceae, and Botrychiineae two families, Botrychiaceae and Helminthostachyaceae.

#### Literature<sup>1)</sup>

- Bower, F. O.      The ferns Vol. 1 (1923), vol. 2 (1926).  
                          Size and form in plants (1930).
- Ching, R. C.      New family and combinations of ferns. Bull. Fan. Inst.  
                          Biol., Bot. Ser., **10**: 235 (1941).
- Chrysler, M. A.   The shoot of *Botrychium* interpreted as a series of di-  
                          chotomy, Bull. Torrey Bot. Club, **72**: 491 (1945).
- Christensen, C.   Index Filicum (1905-06), Supplementa I-III (1913, '17, '34).  
                          Filicineae in Manual of Pteridology (1938).
- Copeland, E. B.   Fern evolution in Antarctica. Philip. Journ. of Sci. **70**:  
                          157 (1939).
- Genera filicum (Genera of the ferns) (1947).
- Farmer, J. B. & Freeman, W. G.   On the structure and affinities of *Hel-*  
                          *minthostachys zeylanica*. Ann. of Bot. **13**: 421 (1899).
- Lyon, H. L.      A new genus of Ophioglossaceae. Bot. Gaz. **40**: 455 (1905).
- Maekawa, F.      Dichotomy in *Ginkgo* and its bearing to phylogeny, Journ.  
                          Jap. Bot. **22**: 119 (1948).
- Milde, J.      Filices Europae at Atlantidis, Asiae minoris et Sibiriae (1867).
- Nakai, T.      Two new species of ..... and a new system

1) Literatures cited in No. 2, Journ. Jap. Bot., 27: 170 (1952), were omitted here.

- proposed to Marratiales. Journ. Jap. Bot. 13: 1 (1937).
- Nishida, M. Dichotomy of vascular system in the stalk of Ophioglossaceae. Journ. Jap. Bot. 27: 165 (1952).
- Ogura, Y. Anatomie der Vegetativorganen der Pteridophyta. Handb. der Pflanzenanat. 7 (1938).
- On the some problems of plant morphology (Japanese). Zoolog. & Bot., Tokyo, 5: 151 (1937).
- Small, J.K. Ferns of the southeastern States (1938).

1. Clausen (1938) はハナワラビ屬を *Sceptridium*, *Eubotrychium*, *Osmundopteris* の3亞屬に分け、*Sceptridium* を、1) 地理的分布の最も廣いこと、2) 比較的大きなよく切れ込んだ葉をもっていること、3) 造胞體の發生の初期に *Suspensor* を生ずること等の理由により、最も原始的な群であるとし、これが體の小さくなる方向に分化して *Eubotrychium* となり、大きくなる方向に分化して *Osmundopteris* となつたとした。然し地理的分布がより廣いと云ふことは必ずしも古い群であると云う理由にはなるまい。又大きなよく切れ込んだ葉を持つていと云ふ事が原始的であると云ふのは筆者には不可解である。*Suspensor* の有無の系統學的意義に就いては後日發生學の立場から改めて論じたい。

2. 筆者は原始維管束植物が二分分枝のみを行つていた事から、これを原始的なものの標識であるとして、上記の三亞屬の中で最も typical に二分分枝が見られる *Eubotrychium* を最も原始的な群であると考へ、つゞいて *Sceptridium*, *Osmundopteris* と分化したものと考えた。

3. 同様にハナヤスリ屬中の亞屬も、*Euophioglossum*, *Ophioderma*, *Cheiroglossa* の順に配列する。而して *Rhizoglossum* に關しては、筆者は標本も又充分な文獻も見ないのでこゝに觸れないでおく。

4. 維管束系の解剖學的特徴を重視し之を新標識として採用し、ハナヤスリ目を分類すれば、上記の各亞屬を夫々獨立せる屬として認めるのが妥當と考へる。この中、*Osmundopteris* については Small (1938) が *O. virginiana* Small 一種を記載しているのみであるので Clausen (1938) が記載している他の4種は新組合せとなる。日本産のものはナツノハナワラビ *Osmundopteris virginiana* (L.) Small 及びナガハノナツノハナワラビ *O. stricta* (Underw.) Nishida の2種である。

5. ハナワラビとハナヤスリは二分分枝の様子が著しく異つてゐる。ハナヤスリでは維管束系が網状をなしているために二分分枝が亂されているのである。しかもこの網状脈間隙は一つの telome の中の維管束(恐らく原生中心柱)が壓し擴げられた結果生じた割れ目より生じたものと考へられる節があるので、ハナワラビの二分分枝に終るものとは、脈の成因を大いに異にしている。従つてハナヤスリ目をハナヤスリ亞目及びハナワラビ亞目の二つに大きく分けるのが適當と思ふ。前者にはハナヤスリ科のみ、後者にはハナワラビ科、及びミヤコジマハナワラビ科の2科を配する。

## 櫻井久一\*: 興味ある日本産蘚類報告 (3)

Kyuichi SAKURAI\*: Reports of some interesting mosses in Japan (3).

**Microphilonotis gemmipara** Sak. n. sp. (Fig.1). こもちいとさはごけ

Planta tenerrima, caespitosa, caespitibus densis, superne laete viridibus, intus fuscescentibus, mollibus, sericeis. Caulis suberectus, infra 7 mm altus, plerumque simplex, infra medio laxiuscule, apicem versus conferte foliosus, infra medio rubro-radiculosus. Folia imbricata, madore erectopatentia, inferiora ovato-lanceolata, sensim attenuata, acuta, superiora ovata, concaviuscula, usque ad 0,3-0,5 mm longa, 0,2-0,3 mm lata; costa distincta, aristata; cellulis in medio folii rectangularibus, chlorophyllosis, levibus. Bulbilus sparsus, oviformis, fuscus. Gemmae in axillis foliorum numerosissimae, virides. Caetera deest.

Honshu: Prov. Iwaki, Nakamura-machi, terricola (Leg. T. Higuchi-Typus in Herb. K. Sakurai No. 20530, 25 Nov. 1951).

本属中他種と異なる特徴は次の通りである。

1. 葉は茎の上部に於て卵形を呈し肋は著しく伸出, 下部の葉は二等邊三角形状をなす。
2. 蘚の子型の小蘗と芽状の胞芽を見る。後者は極めて多数で葉の基部に着生し容易に落ちる。福島縣中村町地上にて信夫高校茂庭分校の樋口利雄君の採品。

**Fissidens (Aloma) Shinii** Sak.

n. sp. (Fig.2). みぎはほうわうごけ

Rupicola. Planta minuta, caespitosa, caespitibus densis, luteo-viridibus. Caulis erectus, simplex, inferne rubro-radiculosus, usque ad 4 mm (sterilis), 1 mm (fertilis) altus. Folia sterilis 4-8 juga, fertilis 3-4 juga, inferiora minora, sensim majora, lanceolata, marginibus mamilloso-crenulatis, elimbata, 1 mm longa, 0,1 mm lata. Lamina vera supra medio producta, lamina dorsalis basin versus sensim angustior. Costa pellucida, sub apicem evanida. Lamina papyracea, pellucida, dilute chlorophyllosa, cellulis rectangularibus,

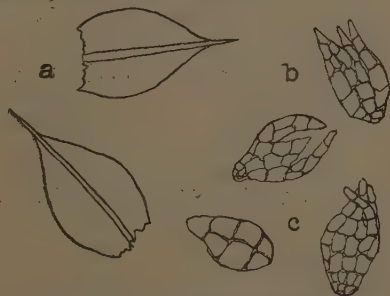


Fig. 1. *Microphilonotis gemmipara* Sak. n. sp.  
a) 莖葉 × 40 b) 胞芽大 c) 小胞芽大

\* 共立薬科大学 Kyoritsu Pharmaceutical College, Tokyo.

densis, humiliter papillosis. Seta 5 mm alta, curvatula. Theca erecta, deoperculata ovoidea, 0,5 mm longa, 0,4 mm crassa.

Kiushu: Prov. Ohsumi, Makizono (Leg. T. Shin—Typus in Herb. K. Sakurai No. 20468, 23 Nov. 1950).

本品は土佐産の *F. Yamamotoi* Sak. に近縁の種と考へらる。大隅國牧園町新川溪谷の産。新敏夫君の採品。



Fig. 2. *Fissidens Shinii* Sak. n. sp.

a) 全形  $\times 5$  b) 莖葉  $\times 30$

ulariter rotundatis, quadratis, oblongis intermixtis, mamillosis. Sterile.

Honshu: Prov. Kai, mt. Akaishi, Koshibugawa (Leg. N. Takaki—Typus in Herb. K. Sakurai No. 20088, 17 July 1949).

本品は赤石山麓小澁川沿岸岩上にて高木君の採る所。繊細 2 cm の蘚座を形成す。莖は直立す。



Fig. 3. *Triquetrella tenuicaulis* Sak. n. sp.

a) 全形  $\times 3$  b) 莖葉  $\times 15$

apicem folii evanida vel continua. Lamina lutea, cellulis rotundato-quadratis, basin versus laxioribus, rectangularibus, supra medio minutissime papillosis. Theca semimersa, deoperculata conica, eurystoma, sicca 8 sulcata. Seta 1 mm alta. Peristomium simplex, lanceolatum, 16, rubiginosum, fere ad medium

***Triquetrella tenuicaulis* Sak. n. sp. (Fig. 3).** みやまちむかでこけ

Rupicola. Planta tenuissima, caespitosa, caespitibus densis, dilabentibus, dilute fuscescentibus, tantum superne lutescentibus, opacis. Caulis filiformis, 2 cm altus, erectus, sicca rigidiusculus, plerumque simplex, remote foliosus, infimus paulum radiculosus. Folia ovato-lanceolata, obtusa, reflexa vel reflexo-tortuosa, infra medio recurvata, integra, usque ad 1,5 mm longa, 0,4 mm lata; costa continua, dorso mamillosula; cellulis lumine valde irregulariter rotundatis, quadratis, oblongis intermixtis, mamillosis. Sterile.

***Orthotrichum* (*O. cupulata*) *Takakii* Sak. n. sp. (Fig. 4).** くもまたちひだこけ

Rupicola, alpicola. Densissime caespitosum vel pulvinatum, pulvinis superne luteo-viridis. intus fuscescentibus, fusco-tomentosus, opacis. Caulis 1 cm altus, superne irregulariter ramosus, ramis brevibus, dense foliosis. Folia ovato-elongata, semitortuosa, obtusa vel subacuta, integra, usque ad 2 mm longa, 0,2 mm lata; costa infra

2-3 partitum, apice dilutum, transverse striatulum, distinctissime longitudinaliter variolare striolatum, in toto minutissime papillosum, intuse dense trabeculatum. Sporae virides papillosae. Operculum rostratum. Calyptra cucullata, nuda. Perichaetium internum e basi semivaginant ovatum, subito setaceo-attenuatum, nervo continuo.

Honshu: Prov. Kai, mt. Akaishi, Higashidake, 3000 m (Leg. N. Takaki—Typus in Herb. K. Sakurai No. 20110, 17 July 1949). Prov. Shinano, mt. Yatsugatake, Yokodake, 2800 m (Leg. N. Takaki in Herb. K. Sakurai No. 20109, 15 July 1948).

本品は歐洲アルプスに産する *Orthotrichum cupulatum* Hoffm. に近縁の種と考へらるるも蘚齒が2-3裂すること、前蘚齒のないこと、葉の餘り捲かざること等により新種と決定す。肋は上部の葉に於ては頂に達せざるも下部の葉に於ては伸出することあり。葉形多型なり。高木君の赤石山頂及八ヶ岳横岳の岩上に於ける採品。

***Merceyopsis excavata* Sak. n. sp.**  
(Fig. 5). いとみづさじごけ

*Dioica videtur. Planta tenella, caespitosa, caespitibus densissimis, latissime extensis, superne virides intus fusciscentibus, opacis. Caulis erectus, 5-7 mm altus, infimus densissime tomentosus, pluri-divisus, hic illic flagelliformiter attenuatus. Folia linearia, subreflexa, obtusa vel subacuta, marginibus mamilloso-crenulatis, usque ad 0,5-0,7 mm longa, 0,1 mm lata. Costa infra apicem folii evanida, dorso carinata, mamilliosa. Cellulis laxis, irregulariter quadratis chlorophyllous, obscuris, dense minute mamillis, basin versus laxis, rectangularibus, hyalinis, excavatis. Folia perigionali ovata vel ovato-oblonga, distincte excavata. Caetera desunt. Rupicola.*

Shikoku: Prov. Iyo, Bessi-dōzan (Leg. K. Oti—Typus in Herb. K. Sakurai No. 20538).

繊細なる一品で極めて密なる毛氈を敷きつめたる觀あり。雄器の外花葉卵形を呈し莖葉は線形兩者とも基部著しく凹む。伊豫別子銅山にて越智一男君の採品。

***Hygrophypnum Mizushimae* Sak. n. sp.** (Fig. 6). おほみづはひごけ

*Planta speciosa, caespitosa, caespitibus laxis, superne luteo-viridis, intus*

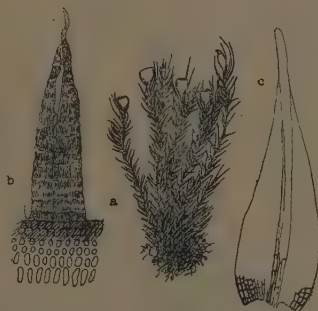


Fig. 4. *Orthotrichum Takakii* Sak.

n. sp.

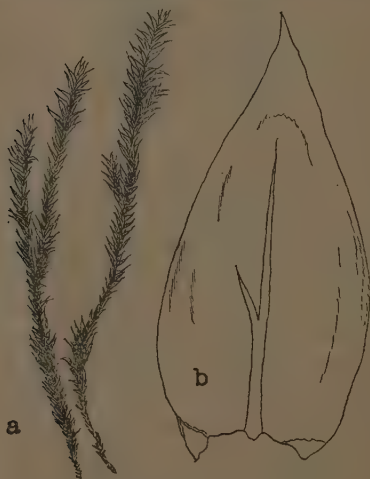
a) 全形 × 3 b) 前蘚齒大 c) 下部莖葉 × 20

Fig. 5. *Merceyopsis excavata* Sak.

a) 全形 × 5 b) 一部拡大 c) 葉 × 30

(Leg. U. Mizushima—Typus in Herb. K. Sakurai No. 20370, 25 Aug. 1950).

外形北歐に産する *Calliergon megalophyllum* に酷似す。植物體壯大にして扁壓。葉長 4 mm に達す。尾瀬ヶ原濕原中にて水島ウララ君の採品。

Fig. 6. *Hygrohypnum Mizushimae* Sak. n. sp.

a) 全形 × 1 b) 葉 × 15

angusta, subcontinua, dorso superne humiliter bilamellato-serrulata; cellulis anguste rectangularibus, inter se porosis, basilaribus in toto aureis, alaribus quadratis, incrassatis, luteo-fuscis. Seta rubra, flexuosula, 1.5 cm alta. Theca

fusciscentibus. Caulis suberectus, simplex vel dichotome ramosus, in toto complanate foliosus, usque ad 8-10 cm longus, cum foliis 7-8 mm latus. Folia caulina subdecurrentia, lanceolata, breviter acuta, concaviuscula, integra, erecta, ca 4 mm longa, 2 mm lata; costa ad 3/4 folii evanida, simplex vel ramulosa. Cellulis in toto anguste rectangularibus, levis, alaribus vesiculosus, hyalinis, rectangularibus, excavatis. Caetera desunt.

Honsu: Prov. Kodzuke, Hochmoore Oze

**Dicranum** (Pseudo-Chorisodontium) **Maedae** Sak. sp. nov. (Fig. 7). なかざしつぽごけ

Planta mediocris, caespitosa, caespitibus densis, lutescentibus vel dilute viridescens, opacis. Caulis decumbens, deinde suberectus, infra 5 cm longus, dense fusco-tomentosus, simplex vel dichotome ramosus, dense secunde foliosus. Folia e basi constricta late lanceolata, falcata, canaliculato-concava sensim elongate attenuata, ca 7-8 mm longa, in latitudine 1.1 mm lata, supra medio serrulata; costa basi

suberecta, breviter cylindrica, 2,2 mm longa, 0,5 mm crassa. Peristomium revolutum, breviter lanceolatum, tantum 0,2 mm altum.

Honshu: Prov. Shinano, Kiso, Miura (Leg. T. Maeda—Typus in Herb. K. Sakurai No. 20121, 23 Sept. 1950).

本品は蘚菌發育不良の一群中に入る新品で植物體黃色をなし密なる蘚座を作る。莖葉下部は割合に巾廣く急に細くなる。肋は細し、蘚菌の發育不良の度は *D. Sakuraii* Rms. に似てゐる。信州木曾三浦にて前田禎三君採る。

*Dicranum* (Scopario-Dicranum) *Naganoi* Sak. n. sp. (Fig. 8). りやうがみしつばごけ

*Planta speciosa, caespitosa, caespitibus laxis, superne laete viridibus, intus fusciscentibus, mollibus, subsericeis. Caulis 8-10 cm altus, suberectus, simplex vel superne divinus, parce tomentosus, apice caudiformiter attenuatus. Folia sicca undulato-incurva, madore patentia, e basi ovato-lanceolata, canaliculato-concava, supra medio anguste recurvata, parce serrulata, usque ad 1 cm longa. Costa continua, dorso prominente, superne mamilloso-serrulata. Cellulis in toto regulariter quadratis vel breviter rectangularibus, chlorophyllosis, mamillis, basin versus laxioribus, alaribus externis fuscis, internis hyalinis, bene evolutis. Seta bina, aggregata, sublutea, tenui, 3-3,5 cm longa. Theca suberecta, oblonga, 3 mm longa, curvatula. Operculum rostratum.*

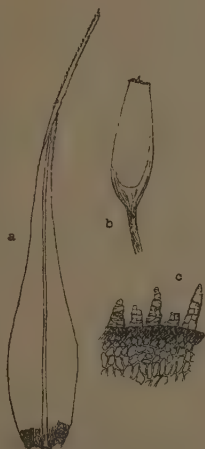


Fig. 7. *Dicranum Maedae* Sak. n. sp.

a) 莖葉  $\times 8$  b) 子囊  $\times 7$   
c) 蘚菌座大



Fig. 8. *Dicranum Naganoi* Sak. n. sp.

全形  $\times 1$

Honshu: Prov. Musashi, Chichibu (Leg. I. Nagano-Typus in Herb. K. Sakurai No. 20307, 20305, 20318, Sept. 1951).

本品は秩父兩神山の産で *Scopario-Dicranum* 中第1群に入る可き子囊柄多出し且つ黄色を呈する種で、外形は *D. caesium* Mitt. に酷似し、葉の形状は *D. perindutum* Card. の夫れとよく似てゐるが次の様な特徴がある。

1. 葉は乾けば波状をなし捲縮する。
2. 細胞は規則正しき方形時に矩形でマミラを密生す。本品程配列規則正きものなし。
3. 葉の鋸齒鋭からず、葉の上部狭く捲く。
4. 翼細胞は殆ど肋に達し肋は葉底の約 1/5 を占む。秩父長瀬博物館の永野巖君の採品。

○海拔 200m にしてダケカンバあらわる (上野 裕) Yutaka UENO: *Betula Ermani* Chamisso var. *communis* Koidzumi appears at 200 metres above the sea-level.

昨年9月28日、福島縣西白河郡三神村須乗新田の雑木林中に、たゞ1本ではあるが、ダケカンバを發見した。1/50,000 地形圖によると、海拔は凡そ 220 乃至 240 m である。通常 1,500 m 前後の高地でないと見られないダケカンバが海拔わずか 200 m 餘の低地に見られたのは實に意外であつた。

西白河郡附近でダケカンバが存在するのは那須火山脈の諸峯であるが、それとても三神村から 40km 近く離れており、そこから種子が飛來したとは考えられない。

發見地は道路のすぐ西側の平坦な林で、クリ、アズマネザサ基群叢をなすものと認められた。

*Betula Ermani* Chamisso var. *communis* Koidzumi (Dake-kamba in Japanese) is usually found from high land of 1,500 metres or so. Beyond my expectation, it was found at Mikami Village, Nishi-Shirakawa County, Fukushima Prefecture. The locality is about 200m above the sea-level, and I feel this fact very queer.

○乳汁をもつマメ科植物の例 (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: An instance of leguminous plants having milk-sap.

かつて栽培されていたアメリカホドイモ (*Apios tuberosa* Moench) の若芽や花梗をつまんだら乳汁が出たので、ホドイモでためしたら、やはり汁が出た。マメ科のことだからキキョウ科の場合のように乳管があるわけではないが乳汁の出る例としてあげておく。

## 野口 彰\*: 日本産蘚類の研究 (13)\*\*

## Akira NOGUCHI\*: Notes on Japanese Musci (13)

72) *Fissidens yakumontanus* Noguchi, sp. nov. (Fig. 52)

Planta robusta inferne ferruginea superne lutescenti-viridis, dense caespitosa. Caulis arcuato-recurvus superne saepe undulatus, ad 10 cm longus cum foliis ca 6 mm latus. Folia multijuga, sicca homomalla superne circinato-crispata, madida homomallo-patentia, anguste lingulata apice obtusa vel rotundato-obtusa, elimbata,  $3.8 \times 1 \sim 4 \times 0.7 \sim 4 \times 0.85 \sim 4.7 \times 0.85$  mm, lamina vera ultra medium folii producta oblique truncata elimbata, lamina dorsali inferne decurrentia, elimbata, costa lutescenti valida basi ca 0.08 mm lata, superne sensim angustiora et  $\pm$  flexuosa, longe infra apicem folii evanida, marginibus integerrimis, cellulis laminalibus minutis convexis  $\pm$  obscuris, medianis irregulariter hexagonis

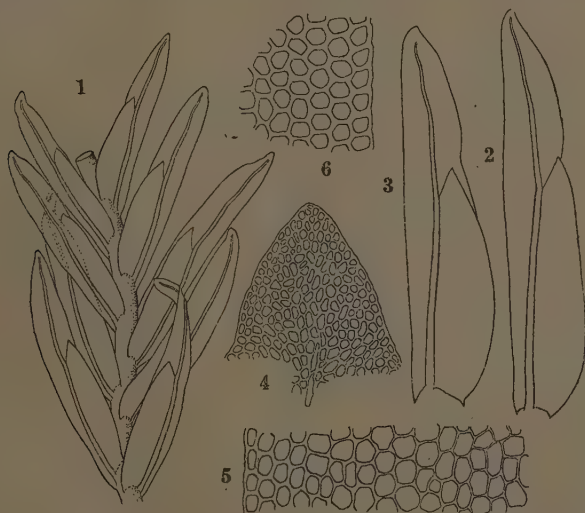


Fig. 52. *Fissidens yakumontanus* Nog. 1, part of stem  $\times 9$ . 2, 3, leaves  $\times 13$ . 4, apical part of leaf  $\times 156$ . 5, marginal part of dorsal blade  $\times 294$ . 6, marginal part of ventral blade  $\times 294$ .

\* 大分大學學藝部生物學教室 Biol. Inst., Faculty of Liberal Arts, Oita Univ. Oita, Japan.

\*\* 文部省科學研究費による研究の一部。大分大學學藝部生物學教室業績第 16 號

parietibus tenuibus ca  $8\sim 12\mu$  in diam., marginalibus regulariter hexagonis parietibus crassioribus minoribus  $6\sim 10\mu$  in diam., superioribus rotundato-vel irregulariter hexagonis parietibus crassis  $7\sim 11\mu$ , veris planis basilaribus rectangularibus parietibus crassis  $20\sim 32\times 12\sim 15\mu$ .

Kyusyu: Isl. Yakusima (T. Hasimoto, July 1933 in herb. Nog. no. 8639-typus; T. Sin, May 1950; Y. Kuwahara, June 1951).

乾燥すると、莖は彎曲し、葉殊にその先端部が卷縮するので著しい。また、中肋は葉頂に達せずに終り、葉細胞は小さい。

73) *Barbula nipponica* Noguchi, sp. nov. (Fig. 53)

Planta mediocris, rigida. Caulis ad 3 cm longus, simplex vel parce divisus, flexuosus superne  $\pm$  arcuatus. Folia caulina sicca adpressa, madida erecto-patentia laxa, e basi ovato-oblonga sensim elongatum lineari-lanceolatum attenuata, carinato-concava, inferiora minuta superiora sensim majora ad 2.7 mm longa, marginibus integris medio revolutis, costa valida basi ca 0.12 mm lata, breviter excurrente dorso inferne laevi superne  $\pm$  scabra, cellulis convexis  $\pm$  obscuris parietibus crassis, medianis rotundato-quadratis  $7\sim 10\mu$  in diam., inferioribus medianis laxis longioribus elongato-rectangularibus vel oblongo-hexagonis laevibus hyalinis  $20\sim 35\times 9\sim 11\mu$ , parietibus crassis, alaribus rotundato-quadratis. Bractee perichaetii internae foliis similes. Seta terminalis vel subterminalis,  $10\sim 13$  mm longa, fusca. Theca erecta sub-cylindrica, fusca,  $1.8\times 0.45\sim 2.2\times 0.65$  mm, peristomium capillare sinistratam confertum, ca 0.7 mm altum, membrana humilis.

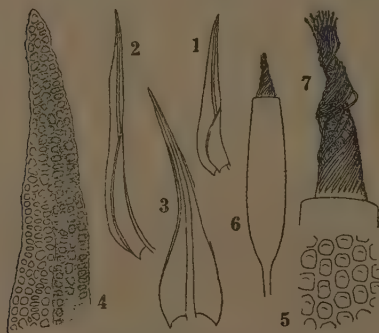


Fig. 53. *Barbula nipponica* Nog. 1, 2, 3, leaves  $\times 13$ . 4, apical part of leaf  $\times 156$ . 5, cells from middle of leaf  $\times 294$ . 6, capsule  $\times 13$ . 7, peristome  $\times 43$ .

Honsyu: prov. Nagato, Akiyosi-mura (S. Matumoto, Mar. 1932 in herb. Nog. 3776-typus). Sikoku: prov. Awa, Simomyomura (A. Nog., Mar. 1928). Kyusyu: prov. Higo, Ono-mura (K. Maebara, May 1951).

var. *gracilis* Noguchi, var. nov.

A typo differt caulis gracilis, foliis minoribus.

Kyusyu: prov. Higo, Issyoti (on limestone) (K. Maebara, Nov. 1951 in herb. Nog. 26570-typus).

葉形、葉細胞のようすや葉の中肋が突出していることなどで、本種は、Mexico や合衆國の一部に分布する *B. Bescherellei* Sauerb. に近いものと思われる。しかし、中肋は北米産のものほど長くは突出していないので別種と考える。

74) *Pleurochaete squarrosa* (Brid.) Lindb. de Tortul. 253 (1864).

筆者は 1950 年根部植物研究所発行の日本蘚類標本集 (*Musci Japonici Exsiccati*) の第 4 集に *Trichostomum crispifolium* Noguchi という未記載の一種を入れた。この標本には古い子嚢が少し残っていて、蒴齒の痕跡も見當らなかつたので、元來蒴齒を缺いているものではないかと判断した。その後、蒴齒のある標本が見つかったので、本種は *Trichostomum* 属のものでなく、種としては歐、米、中國西南部などに廣く分布する *Pleurochaete squarrosa* にあてべきものであることを知つた。しかし、歐米産のような型は、日本では殆どみられず、僅かに次の 1 標本を検出したにすぎない。

Honsyu: prov. Etigo, mt. Kurohime (on limestone) (Y. Ikegami, June 1948).

筆者所蔵の日本産標本の大部分は上述標本集のものと同じく、基本型にくらべて何れも葉が長い線状で疎生している。もつとも、歐洲産でも葉が細長くのびる標本を見たが、本邦産のようには長くならない。本邦産は變種として區別することにする。

var. *crispifolia* (Nog.) Noguchi, comb. nov. (Fig. 54)

*Trichostomum crispifolium* Noguchi, in *Musci Japonici Exsiccati*, ser. 4, no. 162. (1950).

Caulis ad 10 cm longus flexuosus, simplex vel parce divisus. Folia laxa, sicca crispa saepe fragilia, madida patentia apice  $\pm$  arcuato-inflexa, e basi vaginante longissime linearia superne longe attenuata, ad 8 mm longa, carinato-concava, costa  $\pm$  longe excurrente dorso laevi.

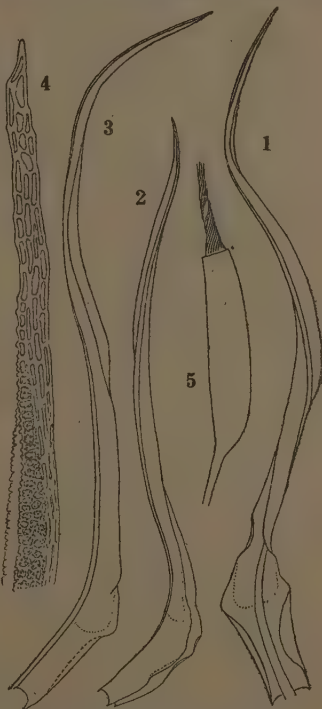


Fig. 54. *Pleurochaete squarrosa* var. *crispifolia* Nog., 1, 2, 3, leaves  $\times 13$ . 4, apical part of leaf  $\times 156$ . 5, capsule  $\times 13$

Honsyu: prov. Mikawa, Miwa-mura (on wet rocks) (N. Takaki, Sept. 1949).

no. 7177-typus) ; prov. Ise, mt. Nonobori (K. Murata, June 1931) ; prov. Nagato, Tyomonkyo (A. Noguchi, Oct. 1928, S. Matumoto, Mar. 1932) ; Yamaguti-city (S. Matumoto, July 1932). Kyusyu : prov. Buzen, mt. Hikosan (A. Noguchi, Oct. 1949) ; prov. Higo, Konose (K. Mayebara, May 1951) ; mt. Siraga (A. Noguchi, July 1931) ; prov. Hyuga, mt. Kirisima (A. Noguchi, Mar. 1933). Formosa : Prov. Taityu, Rakuraku (A. Noguchi, Aug. 1932).

75) *Timmiella anomala* (Br. eur.) Limpr. Laubm. Deutsch. 1 : 592 (1888).

*Pleurochaete* 属のものとして故岩崎二三氏が發表した越後産のものに *Pl. japonica* Iwasaki\* というのがある。ついでにこの標本を調べてみたところ、このものは *Pleurochaete* 属のものでなく、*Timmiella anomala* であることを知つた。この種は、日本では石灰岩地に出る傾向が強いようである。

Honsyu : prov. Etigo, Kotani-mura (N. Iwasaki, Aug. 1938). Sikoku : prov. Tosa, Tosayama-mura (on limestone) (K. Yamamoto, Aug. 1934) ; prov. Iyo, Yanatani-mura (on limestone) (M. Kurita, Apr. 1944).

76) *Helicodontium Hattorii* Noguchi, sp. nov. (Fig. 55)

Planta autoica, minuta. Caulis prostratus radiculosus parce ramosus, ramis ca 3 mm longis, parce breviter ramulosis. Folia caulina sicca adpressa madida erecto-patentia lanceolata potius elongatum attenuata  $0.25 \times 0.1 \sim 0.35 \times 0.12$  mm, marginibus remote serrulatis, costa valde tenui brevi potius hyalina, cellulis medianis oblongo-hexagonis parietibus  $\pm$  crassis brevibus, ca  $30 \times 8\mu$  in diam., superioribus brevioribus, alaribus numerosis quadratis vel subquadratis parietibus tenuibus. Bracteae perichaetii internae lanceolatae apice subulatum attenuatae ecostatae crenulatae, ca  $0.5 \times 0.15$  mm. Seta 5~7 mm. longa laevis. Theca inclinata oblonga  $\pm$  asymmetrica fusca,  $1 \times 0.5 \sim 1.2 \times 0.7$  mm. Peristomium duplex, exostomii dentes fere lanceolati sed raptim attenuati margine irregulares, ad ca 0.15 mm longi, inferne fusci striolati superne lutescentes dense papilloi, lamellis altis, endostomium ad 0.26 mm altum, membrana humilis laevis, processus lineares dentibus externis multe longiores haud carinati lutescentes dense papilloi. Sporae globosae minute denseque papillosae,  $18 \sim 23\mu$  in diam. Operculum e basi conica oblique rostratum ca 0.5 mm altum. Folia perigonia numerosa, interna late ovata acuminata, cochleariformi-concava, paraphysibus paucis.

Kyusyu : prov. Hyuga, Nitinan-city, Kusubaru (S. Hattori, Apr. 1947, no. 20780-typus in herb. Hattori Bot. Lab.).

この種は *Helicodontium* 属の他の種とは趣の違う點をもっている。配偶體について

\* 植物趣味 7:40 (1939).

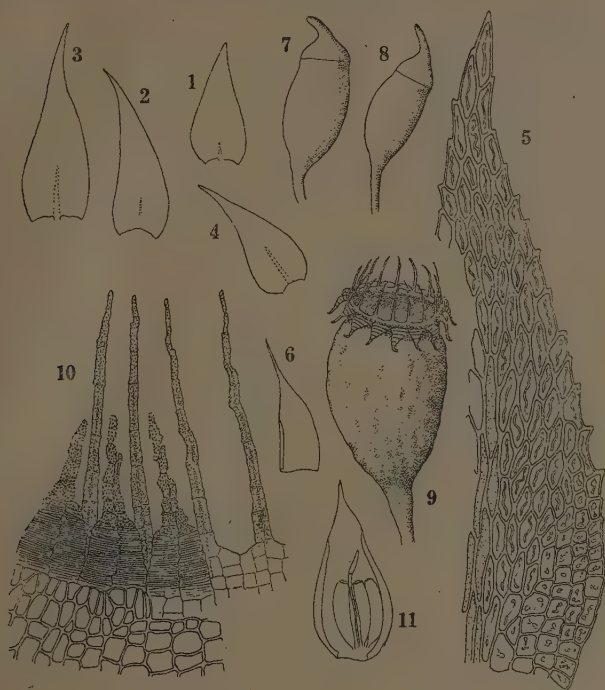


Fig. 55. *Helicodontium Hattorii* Nog. 1, 2, 3, 4, leaves  $\times 13$ . 5, part of leaf  $\times 294$ . 6, inner perichaetial leaf  $\times 43$ . 7, 8, capsule  $\times 13$ . 9, deoperculate capsule when dry  $\times 43$ . 10, peristome  $\times 78$ . 11, inner perigonal leaf with several antheridia and paraphysis  $\times 156$ .

みると、葉形や葉細胞の成り立は *Helicodontium* 属や *Schwetschkea* 属の性質を具えているが、中肋は弱くて不顯著である。孢子體では、蒴齒が複列であることは *Helicodontium* や *Schwetschkea* の場合と別に變つていないが、外齒の下方に横線條のあることは *Schwetschkea* 属と違い、外齒が内齒の齒突起より遙かに短かいことは *Helicodontium* に屬せしめるのも無理があるように思われる。Fabroniaceae の中で、外齒が内齒より短かい属には 1939 年 Bartram\* によつて新しく設けられた *Mcgregorielia* という單型属がある。この属は Philippine から知られたもので、外齒はここに報告する日本産のものよりもつと短かく、ちょうど本邦産の外齒の乳頭のある部分が折れて失われたような形であり、横線條の代りに小乳頭がある。したがつて、本邦産は *Mcgregorielia* 属に入れるわけにもいかず、最も近いと思われる *Helicodontium* 属に入れておく。(續く)

\* Philippine Journ. Sci. 68: 284.

○我國への稻の傳來方向 (藤田安二) Yasuji FUJITA: From where *Oryza sativa* L. came to the Japanese Islands?

稻作の起源は印度だと考えられるが<sup>1)</sup>、紀元前 3000~2500 年代のインダスの古代都市文明に既に灌漑水田遺跡が存在するから、これを稻作の水田に比定する事も可能である<sup>2)</sup>。然し Rig-veda 中には稻を示す梵語 Vrihi はまだ現れず、Atharva-veda に到つて多量に現れるから<sup>3)</sup>、この間に稻作がアーリア民族に周知された事が分る。Vrihi の外、稻の Sanskrit 名としては Unoo, Dhanya, Arunya, Nivara 等<sup>4)</sup> があるが、アーリア民族そのものはもともと稻を持たなかつたのであるから、いづれも印度先住民族からの借用語である事は間違ない。

この Sanskrit 名中の Unoo, Unú, Anna<sup>5)</sup> は Watt<sup>6)</sup> によれば Coromandel 地方の推定梵語だとあるが、恐らく印度原住民族なる Munda 族からの借用語であろう。著者はこの系統の古代語の東方に傳つたものこそ我國の Ine であると思う。この傳播こそ前報<sup>7)</sup> 粟の傳來方向に於て述べた様に原始古代に於ける民族移動によるもので、その中間的殘存として Celebes 南部 Bugi の Wene, 北東 Tontemboan の Wene, 北部 Tolitoli の Bini; Halmahera 北部 Galela の Ino, Tobelo の Pine, 南部 Maba の Pinye; Timor 島の Ané; Tanimbar 島の Wanat; Sumatra 中部 Malay 語の Banih; Borneo Dajak の Bani を擧げる事が出来る<sup>8)</sup>。奄美大島、琉球に於ける Ini<sup>9)</sup> と共にいづれも明かに我國の Ine と同一系統に屬し、我國の稻の南方よりのものを示す。

この南方よりの民族移動の方向を更に正確に指示するものとして興味があるのは東亞の孤立民族 Ainu であつて、Ainu にては稻を Amam<sup>10)</sup> と呼び、これは印度 Bengal に於ける稻の一品種の土名なる Aman<sup>11)</sup> に完全に一致する。Bengal の Amanこそ實に極めて古い印度原住民族の稻の呼稱の一つであると思う。この Aman 系の言葉は更に Iraq の Timan<sup>12)</sup>, Annam, Cambodia の Cham 語の Kaman (粘稻)<sup>13)</sup> となつて殘存する。Ainu が Ine 系語に非ずして、これと全く別の Aman 系語を有する事は前報<sup>7)</sup> の如く Ainu が一層古代に印度を出發して南方より日本列島に入つたものとしてのみよく説明し得る所である。

次に我國に於ける米 (Kome), 支那の米 (Mi) の語源として注目されるのは印度支那 Annam の Kom (かしげる米) 及び Sedang の Hme である<sup>13)</sup>。この系統の言葉も廣く南海に分布し、Sumatra Batak の Emé, Omé; Celebes 北部の Mai, Mei; Philippine Luzon 北部 Ibanak, Itaneg の Ammai, Cebn の Humai<sup>14)</sup>, Bisaya の Homay<sup>15)</sup>; Micronesia Yap の Lome<sup>15)</sup>, Komei<sup>16)</sup>; 臺灣 Panapanayan の Lomai<sup>17)</sup>, Paiwan の Komai<sup>18)</sup>, Ami の Hemai, Hmai (飯), 臺灣の熟蕃クバランの mMai, Numai (飯), ケタガランの Tsumai<sup>15)</sup> (飯); 奄美大島、琉球の Kumi, Fumi, Mai, Me<sup>9)</sup> 等がこれである。この系統はその傳播方向が時代的に相當複雑の様で急にこれを決める事は困難であるが、その原型は Me であつてその起源は恐らく印度支那方面に

あり、これが支那に傳つて Mi となり、南海に出て Me, Mei, Mai となつたものであり、我國の Kome もこの南海からのものと考えられ、支那を通つて Mi→Kome となつたものではないと思う。この點で最も興味あるのは New Zealand の Maori 族に Kome と言う言葉がある事で、Kern によればこれは一般に食物を示す言葉だと言う<sup>19)</sup>。この外南方に於ける稻の呼稱として Padi 系の言語層がある。臺灣 Tayal の Pagai, Saisjat の Pazai, Ami の Panai, Bunun の Pal, Tsou の Payi, Paiwan の Padai<sup>20)</sup>; Philippine Iloko の Pagai, Cagayan の Pagai, Pangasinan の Pagoi, Tagalog の Palai, Bikol の Parai, Bontok の Pazai, Suln の Pai<sup>21)</sup>; Borneo Dajak の Paré; Celebes Toraja の Paé; Java の Pare, Sunda の Pare; Sumba の Pari, Paré; Sumatra Minangkaban の Padi, Pai, Sumatra Malay 人の Padi, Batak の Pagé, Atjeh の Padi<sup>22)</sup>; Malay の Padi, Sakai の Padi<sup>23)</sup>; Annam, Cambodia の Cham 語の Padai<sup>24)</sup>; Bouru 島の Pala, Fala, Hala<sup>25)</sup>, Amboina の Hala<sup>26)</sup> 等がこの系統に属する。臺灣 Tsou の Payi, Sulu の Pai, Sumatra Minangkaban の Pai 及び Celebes Toraja の Paé に連關するものとして朝鮮北部の稻の古代雅語 Pje, Pé<sup>27)</sup> を擧げる事が出来るが、これは我國の Ine と同様この言語層の分布の北限であり、確かに南方系である。

又南方には更に Be, Bai 系の言語層が存在する。Malay の稻を示す Ba, Bar, Bah, Bak, Baba, Be, Beh, Bi, Bai<sup>28)</sup>; Celebes 南方 Bouton 島の Bai<sup>29)</sup>; 印度の一部の Bhat, Bhatta<sup>30)</sup> 等がこれである。

これ等により南方には Me, Mai; Pe, Pai; Be, Bai 等3様の近似層が層序をなして分布する事が分り、このうちでは Be, Bai 最も新しく、Me, Mai が最も古いものの様である。

更に米を意味する南方語 Bras 層では Malay の Bras, Beras, Bayas, Bias; Java の Bras, Baras; Sunda の Bias; Celebes の Biras, Baras, Bugas, Waras<sup>31)</sup>; Philippine Tagalog の Bigas<sup>32)</sup>, Ibanak の Bogat<sup>33)</sup>; Micronesia Palao の Bras, Chamolo の Pugas<sup>34)</sup>; 臺灣 Ami の Brats<sup>35)</sup> 等がある。Kern<sup>36)</sup> によれば西藏にても Bras と言い、Cham 語では Brah と言うが、この事からすればこの系統は Sanskrit の Vrihi から Brah となり更に Bras となつたものなる事が分る。この系統の分布の北限は臺灣であつて我國迄は及んでいない。やや新しい言語層と考えられる。

最後に支那の稻 Tao, Hao は Siam の Kao<sup>36)</sup>, Annam の Gao<sup>37)</sup> に連關し、他にその分布を示さないからやはり印度支那方面から北上した古い系統と考えられる。

安藤氏<sup>38)</sup> は稻の我國への傳來の南海説の否定に臺灣と沖繩との間に呼稱の關聯がない事を擧げられるが、稻の渡來の南方説は上述の如く民族と文化との移動の層位的時代差によつて極めて合理的に説明せられる。即ち Aman 層はアジアの残存最古族のものであり、Ine, kome 層はそれに次ぐオーストロアジア語族に属するものであり、Padi, Bras 層は大體に於てインドネシア古族のものであり、Be, Bai 層は更に新しいマライ

族のものではないかと思われる。著者は Ine 系語を携えたオーストロアジア語族の一系が Aman 系語を持ったアイヌ族に次いで南方より日本列島に渡來し、アイヌを北方に追つて日本先住民族 (Proto-japanese) となつたものであらうと考えている。

(通産省大阪工業試験所)

- 文献 1) Watt: Comm. Prod. Ind.: 825 (1908); Blankenburg (高山譯): 米: 6 (1943). 2) 江上, 板倉, 杉浦: 世界の歴史, 1: 162 (1949). 3) Dymock, Warden, Hooper: Pharm. Indica 3: 601 (1891). 4) Roxburgh: Fl. Indica 306 (1874); De Candolle (加茂譯): 栽培植物の起源 709 (1941). 5) Kirtikar, Basu: Ind. Medic. Pl.: 1359 (1918). 6) Watt: Dic. Econ. Prod. Ind. 5: 514 (1891). 7) 藤田: 植研 27: 223 (1952). 8) Heyne: Nutt. Pl. Nederland. Ind., 1: 251 (1927); 齋藤: 新亞細亞, 5, 4月號: 2 (1943); Stutterheim: 新亞細亞 5, 9月號: 65 (1943). 9) 宮良: 探訪南島語彙稿, 第1編, 225, 227 (1926). 10) Batchelor: Ainu Eng. Dic., 28 (1926); 宮部: 植研 24: 3 (1949). 11) Watt: Comm. Prod. Ind., 828 (1918); Mukerji: Handbook of Ind. Agri., 169 (1923). 12) Hooper, Field: Useful Pl. and Drugs of Iran and Iraq, 147 (1937), (Field Museum of Nat. Hist., 9, no.3). 13) 松本: 古代文化論, 現代史學大系, 10: 87 (1932). 14) Brown: Minor Prod. Phil. Forests 3: 171 (1921); Merrill: Enum. Phil. Pl. 1: 78 (1925). 15) 馬淵: 新亞細亞, 5, 2月號: 74; 3月號: 92 (1943). 16) 泉井: 太平洋協會編大南洋, 24 (1941). 17) 帝國學士院: 高砂族慣習法語彙, 22 (1941). 18) 佐々木: 臺灣植物名彙, 71 (1928). 19) 馬淵: 新亞細亞 5, 2月號: 74 (1943). 20) 佐々木: 臺灣植物名彙, 71 (1928); 帝國學士院: 高砂族慣習法語彙, 20, 41, 49, 101 (1941). 21) Brown: Minor Prod. Phil. Forests, 3: 171 (1921); Merrill: Enum. Phil. Pl. 1: 78 (1925). 22) Heyne: Nutt. Pl. Nederland. Ind. 1: 251 (1927); Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Penin., 1593 (1935); 宇野: マライシヤに於ける稻米儀禮 95 (1944). 23) Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Penin., 1593 (1935). 24) 馬淵: 新亞細亞, 5, 2月號: 74 (1943). 25) Wallace (内田譯): 馬來諸島, (18) (1942). 26) Watt: Dic. Econ. Prod. Ind., 5: 514 (1891). 27) 安藤: 日本古代稻作史雜考, 17, 48 (1951). 28) Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Penin. 1593 (1935); Heyne: Nutt. Pl. Nederland. Ind. 1: 251 (1927). 29) Wallace (内田譯): 馬來諸島, (18) (1942). 30) Watt: Comm. Prod. Ind., 824 (1908); Kirtikar, Basu: Ind. Medic. Pl., 359 (1918). 31) Crawford: Dic. Ind. Islands, 368 (1856); Wallace (内田譯): 馬來諸島, (18) (1942); 宇野: マライシヤに於ける稻米儀禮, 100 (1944). 32) Merrill: Dic. Pl. Names of Phil. Isl., 172 (1903). 33) 馬淵: 新亞細亞, 5, 2月號: 74 (1943). 34) 泉井: 太平洋協會編大南洋, 24 (1941). 35) 安藤: 日本古代稻作史雜考 39 (1951). 36) Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Penin., 1593 (1935). 37) Salomon: Principales Pl. exist en Cochinchine, 25 (1921). 38) 安藤: 日本古代稻作史雜考 38 (1951).

## 代 金 拂 込

代金切れの方は半ヶ年代金（雑誌6回分）384 円（但し送料を含む概算）を  
爲替又は振替（手数料加算）で東京都目黒區上目黒 8 の500 津村研究所（振  
替東京 1680）宛御送り下さい。

## 投 稿 規 定

1. 論文は簡潔に書くこと。
2. 論文の脚註には著者の勤務先及びその英譯を附記すること。
3. 本論文、雜錄共に著者名にはローマ字綴り、題名には英譯を付けること。
4. 和文原稿は平かな交り、植物和名は片かなを用い、成る可く 400 字詰原稿用紙に横書のこと。歐文原稿はタイプライトすること。
5. 和文論文には簡単な歐文摘要を付けること。
6. 原圖には必ず倍率を表示し、圖中の記號、數字には活字を貼込むこと。原圖の説明は 2 部作製し 1 部は容易に剝がし得るよう貼布しておくこと。
7. 登載順序、體裁は編輯部にお任せのこと。活字指定も編輯部でしますから特に御希望の箇所があれば鉛筆で記入のこと。
8. 本論文に限り別冊 50 部を進呈。それ以上は實費著者負擔のこと。
  1. 希望別刷部數は論文原稿に明記のもの以外は引き受けません。
  2. 雜錄論文の別刷は 1 頁以上のもので實費著者負擔の場合に限り作成します。
  3. 著者の負擔する別刷代金は印刷所から直接請求しますから折返し印刷所へ御送金下さい。着金後別刷を郵送します。
9. 送稿及び編集關係の通信は東京都文京區本富士町東京大學醫學部藥學科生藥學教室、植物分類生藥資源研究會、藤田路一宛送附のこと。

## 編 集 員

### Members of Editorial Board

朝比奈泰彦 (Y. ASAHINA)

編集員代表 (Editor in chief)

藤田路一 (M. FUJITA)	原 寛 (H. HARA)
久内清孝 (K. HISAUCHI)	木村陽二郎 (Y. KIMURA)
小林義雄 (Y. KOBAYASI)	前川文夫 (F. MAEKAWA)
佐々木一郎 (I. SASAKI)	津山 尚 (T. TUYAMA)

---

All communications to be addressed to the Editor  
Dr. Yasuhiko Asahina, Prof. Emeritus, M. J. A.  
Pharmaceutical Institute, Faculty of Medicine, University of Tokyo,  
Hongo, Tokyo, Japan.

昭和二十七年九月十五日印刷  
昭和二十六年四月十三日  
第三種郵便物認可

「植物研究雜誌」第二七卷 第九號

定價六〇円

昭和 27 年 9 月 15 日 印刷  
昭和 27 年 9 月 20 日 發行

定價 60 圓  
不許複製

編輯兼發行者 佐々木一郎  
東京都大田區大森調布鶴ノ木町231の10  
印刷者 小山惠市  
東京都千代田區神田豐島町9  
印刷所 千代田出版社  
東京都千代田區神田豐島町9  
發行所 植物分類・生藥資源研究會  
東京都文京區本富士町  
東京大學醫藥部藥學科生藥學教室  
日本出版會會員番號 B119035  
津村研究所  
東京都目黒區上目黒8の500  
(振替 東京 1680)